

巻頭言

暗闇を照らす光

立教大学チャプレン 藤田 美土里



「クリスマス」と聞くと、皆さまはどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。

今や世界的な祝祭となったクリスマスに、華やかで賑やかな印象を持つ方も少なくないことでしょう。しかし、聖書に記された最初のクリスマスは、そうした華やかさとは対照的に、人々が寝静まった夜にひっそりと起きた出来事として記されています。

マタイによる福音書第2章では、夜空に輝く星に導かれた東方の博士たちが、幼子イエスを拝みに訪れました。またルカによる福音書第2章では、野宿していた羊飼いたちの前に主の天使が現れ、救い主の誕生を告げたとあります。救い主の誕生という驚くべき知らせを最初に受けたのは、社会の周縁に生きる羊飼いたち、そして異邦の博士たちでした。それは、神の救いの業がこの世の権力の中心からではなく、むしろ小さく弱い立場にある人々の間から始まることを示しています。この物語を聞いた人々は、暗闇の中に光が差し込んだような、喜びと希望に満たされたことでしょう。



キリスト降誕を再現したクリスマス・クリブ
(立教学院諸聖徒礼拝堂)

このクリスマスの物語は、昔々の出来事として終わったわけではありません。それは今もなお続いている。争いの中で傷ついた人々、悲しみの中にある人々、そして私たち一人ひとりの日常の中でも、主は変わることなく暗闇を照らす光として働いておられるのです。

私は今年の4月から立教大学の非常勤チャプレンとして勤務しております、藤田美土里と申します。聖公会の信徒の家庭に生まれた、いわゆるボーン・クリスチャンですが、転勤の多い家庭で育ったため、教会に通い始めたのは小学6年生の頃でした。リベラルな父の意向だったのか、この頃まで自分がクリスチャンだという自覚無く過ごしました。

ミッションスクールに通い始めた私は、毎朝の礼拝を通して少しずつイエスさまのことを知るようになりました。当時、祈祷書は文語体で書かれており、教会での歌ミサはまるで意味不明の呪文のように感じたものです。けれども、意味もわからないまま覚えた祈りの言葉が、後になって心に深く響くようになったことを思うと、そこにも意味があったのでしょう。今でも親友の幼なじみとの出会いなど、楽しい経験もたくさんありましたが、同時に「いつか教会から解放されたい」と思っていた頃でもありました。

そんな私が今、聖職者として働いていることを、自分でも不思議に感じことがあります。そこには、思いがけない人生の転機がありました。

誰の人生にも予想もしない出来事が起こるものですが、私にとってそれは、10年以上

前に訪れた“暗闇”のような困難でした。その時、私は「なぜ神さまはこんなことをなさるのだ。」と怒りをぶつけました。それでも収まらず、なお答えを求めて、必死に聖書を読み続けました。何年も礼拝でみ言葉を聞いていたはずなのに、あの時ほど貪るように聖書を読んだことはありません。

今振り返れば、その暗闇の中で心を保てたのは、神の存在を知っていたからだと確信しています。もし教会とのつながりがなければ、今も迷いの中にいたかもしれません。あの時の経験は、何十年も前に心に蒔かれたみ言葉の種が、芽を出すきっかけとなったのでしょう。

当時通っていた教会には、社会的課題に関心の深い方がいて、講演会や集会などによく誘ってくださっていました。体調を崩していた私はなかなか参加できませんでしたが、ある時「これからは教会で頼まれたことは断らない」と心に決め、その日その日に起こる出来事に身を委ね、巻き込まれてみることにしました。今思えば、この小さな決心が心の解放につながったかもしれません。不安だった体調も徐々に回復し、以前より心が前向きになっていきました。

それは、「自分に頼る生き方」から「主に委ねる生き方」へと変えられるプロセスであり、見えない恐れからの解放でもありました。すると、不思議なことに、自分の想像を超えた出来事が起こり始めました。まるで化学反応のように、新たな出会いがまた新たな出会いを生み、疲れ切って自分の中に押し込めていた好奇心が再び息を吹き返していったのでした。

祈祷書の中には、祈るたびにこの時の経験を思い起こさせる一節があります。

わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求め、また思うことの一切を、はるかに超えてかなえてくださることのできる方に、教会により、またキリスト・イエスによって、栄光が世々に限りなくありますように。アーメン。

そう、神は私たちの思いをはるかに超えてかなえてくださる方であることを覚えておかなければなりません。それは頭では理解できても、実際にはそう思えない時もあるでしょう。しかし、この祈りが受け継がれてきたものであるならば、同じように感じた信仰者が、これまでにもたくさんいたという証しであります。

私たちが暗闇の中にいると感じる時も、神は必ず私たちの祈りを聞いていてくださいます。暗闇の中に輝く光は、「あなたは独りではない」「あなたはかけがえのない大切な存在なのだよ」と語りかける、神さまからのメッセージでもあるのでしょう。

降臨節を過ごす日々の中で、皆さまお一人おひとりの心のうちに、キリストの光が灯されていきますように。



池袋キャンパスイルミネーション